生きることは願うこと

先月この欄で柳ケ浦高校生小山ゆかりさんの高い志に貫かれた文章を紹介した。その手記の希望が私の所にも殺到した。中学生もいた。大分市住吉小学校六年の学級通信にも紹介された。きわだって多かったのは孫たちへ送るという高年の皆様だった。

「毎夜一人になって二度三度読むのです。涙なしには読めません。七十にもなりゆかりさんと比べて恥ずかしい限りの心の持ちようでした」（大分市・和藤シズさん）。真の生涯学習とはこういうことをさす。自己を常に新にされている。異色は「私の矯正施設の指導に活用したい」（広瀬文和さん）苦悩に明け暮れる受刑者たちの胸にしみ入る慰めであろう。

私は県外の知人にもお送りした。「看護学校で読んで聞かせます。環境はあってないようなもの」（永杉喜輔群馬大名誉教授）。けんめいに生きるかどうか、それのみが環境のよしあしを決定する。

日夜不幸な乳幼児と共に在る熊本市・乳児院長潮谷義子さん―「子供に心の豊かさ

を育てはぐくむ力は、親のありように深く関わっている」。

非行少年たちと共に生きられる日本福祉の最高峰谷昌恒氏（北海道家庭学校長）―

「障害の親たちがせめて人なみに子をもうけたいと思うのは極く自然な感情です。しかし子と生まれて乗りこえなければならない大きな山があります。その山を親と子とが必死になって乗りこえたまことに感動を呼ぶ実例です。涙が出ました」。

（一九九一年十二月二十日）